

2025年5月23日

会社名 株式会社 ペルセウスプロテオミクス
代表者名 代表取締役社長 執行役員 横川 拓哉
(コード番号：4882 東証グロース)
問合せ先 取締役執行役員 管理部長 鈴木 信一
(TEL. 03-6264-8224)

2025年3月期決算説明会書き起こし記事公開のお知らせ

当社は、株主、投資家及びステークホルダーの皆様への公平な情報開示の観点から、2025年5月19日に開催した機関投資家向け決算説明会の質疑応答を含む書き起こし記事を公開いたします。なお、ご理解いただきやすいよう、一部内容の加筆・修正を行っております。

当社は引き続き、全てのステークホルダーの皆様当社のご理解を深めていただけるよう、情報発信に努めてまいります。

以上

株式会社パールセウスプロテオミクス

(証券コード： 4882)

2025年3月期 決算説明会 書き起こし

開催日時： 2025年5月19日 16:00～16:40

開催方法： オンライン

登壇者： 代表取締役社長 横川 拓哉

取締役管理部長 鈴川 信一



横川：

本日は、株式会社ペルセウスプロテオミクス 2025 年 3 月期決算説明会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。代表取締役社長の横川でございます。

それではこれより、2025 年 3 月期決算について説明させていただきます。

目次		
01	当社について	
02	2025年3月期の計画と実績	
03	トピックス	
04	2025年3月期決算概況	
05	当社の目指す姿と取り組み	

2

本日の内容でございます。

最初に、当社の概要について、ご説明させていただきます。

その後、2025年3月期の計画と実績、トピックス、2025年3月期決算の概況、最後に当社の目指す姿と取り組みについて、お話をさせていただきたいと思っております。

01 当社について

最初に、当社の概要についてご説明致します。

会社概要

最先端の抗体技術で世界の医療に貢献する会社です

社名 株式会社ベルセウスプロテオミクス (略称: PPMX)

設立 2001年2月

事業内容

- 抗体医薬品の開発
- 抗体研究支援
- 抗体・試薬販売

証券コード 4882

拠点 本社・ラボ: 東京都中央区日本橋箱崎町30-1
名古屋ラボ: 愛知県名古屋市千種区千種2-22-8

資本金 2,437百万円*

従業員 32名* (臨時従業員は含まず)

* 2025.3.31現在

当社は、最先端の抗体技術で世界の医療に貢献することを目指す会社です。
設立は 2001 年 2 月になります。

スライド右側の図は、事業内容を示しております。

中心にオレンジ色で最先端の抗体技術と書いてありますが、これをコア技術として、抗体医薬品の創薬開発をメインに、抗体研究支援としてアカデミアや他の企業の抗体に対する研究の支援を、また、抗体・試薬販売として研究用の抗体・試薬を販売しています。

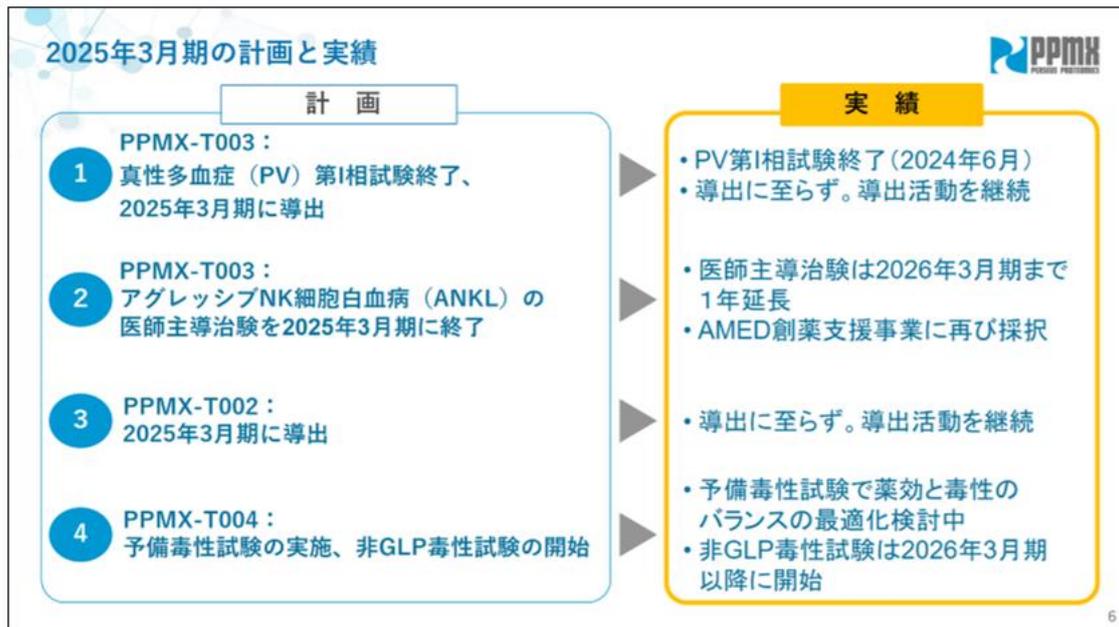
証券コードは、4882 です。

拠点は、本社と併設したメインのラボが東京都中央区日本橋箱崎町にあります。また、名古屋ラボが愛知県名古屋市千種区にございます。

現在の従業員は、32 名になります。

02 2025年3月期の計画と実績

続きまして、2025年3月期の計画と実績です。



このスライドでは、左側に計画を、右側にはその実績を示しております。

1点目は、PPMX-T003の真性多血症 (PV) 患者さんを対象とした第I相試験の終了および2025年3月期に導出するという計画でございます。

第I相試験は、2024年6月に終了しました。しかしながら、導出は期日を達成できず、現在も導出活動を継続している状況です。

2点目は、PPMX-T003のアグレッシブNK細胞白血病 (ANKL) 患者さんを対象とした医師主導治験を2025年3月期に終了するという計画です。

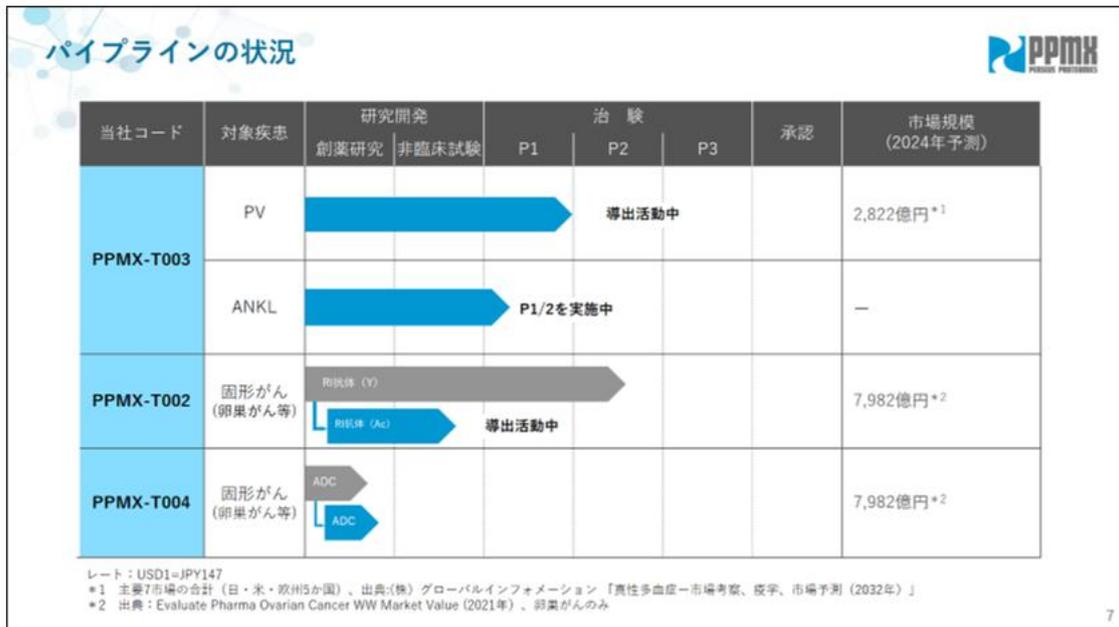
医師主導治験は、2026年3月期まで1年間延長することが治験調整医師の判断で決定しております。

なお、この治験はAMED創薬支援推進事業に再び採択されることになりまして、これについては後ほどもう少し詳しく説明したいと思います。

3点目は、PPMX-T002を2025年3月期に導出するという計画です。

PPMX-T002は導出に至らず、現在も導出活動を継続しております。

4点目は、PPMX-T004の予備毒性試験の実施と非GLP毒性試験を開始するという計画です。予備毒性試験は実施しておりますが、薬効と毒性のバランスの最適化を現在も継続しているという状況です。伴いまして、非GLP毒性試験の開始は2026年3月期以降になると考えております。



パイプラインの状況をまとめております。

PPMX-T003 は、PV と ANKL の二つの疾患を対象に治験を行っておりまして、PV については既にフェーズ 1 が終了し、現在、導出活動中です。

一方、ANKL についてはフェーズ 1/2 の医師主導治験を現在も実施中でございます。

PPMX-T002 (⁹⁰Y) は、以前、米国にて治験を実施してはいたが中断し、現在は、放射性同位体を ⁹⁰Y からより効果の強い ²²⁵Ac に変えたもので非臨床試験を行っている状況です。

PPMX-T004 は ADC ですが、こちらについては創薬研究の段階です。



PPMX-T003 の進捗状況について、もう少し詳しく説明したのがこちらのスライドです。

PPMX-T003 は、2021 年 3 月に健常人における第 I 相試験が終了しまして、その後、2024 年 6 月には PV 患者さんを対象とした第 I 相試験が終了しております。

これを受けて、現在、導出活動を継続している状況です。できる限り早期の導出を目指しております。

1 PPMX-T003 : PV
第66回ASH (米国血液学会) を含む国内外の学会で発表

FY2025/3のPPMX-T003学会発表

日本	2024年7月13～14日	第14回JSH International Symposium 2024
米国	2024年12月7～10日	第66回ASH年次総会 世界最大の血液学会

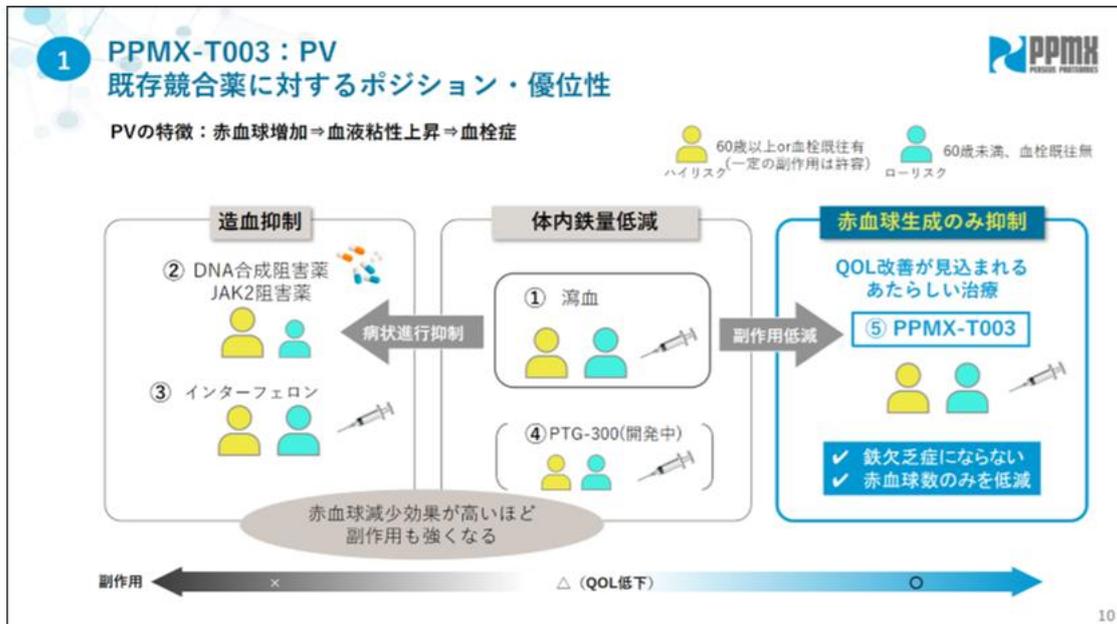
< PV患者さんの第I相試験結果を報告 >

- 6例中5例で12週間の瀉血不要期間を達成
- 6例全てで重篤な副作用なし

9

PPMX-T003 の PV 患者さんを対象とした第 I 相試験のデータは、2024 年 7 月に日本血液学会の国際シンポジウムで報告しております。

また同年 12 月には、世界最大の血液学会である米国血液学会において、主要な結果として PV 患者さん 6 例中 5 例で 12 週間の瀉血不要期間を達成したこと、それから 6 例の全てで重篤な副作用がないという安全性について、報告しております。



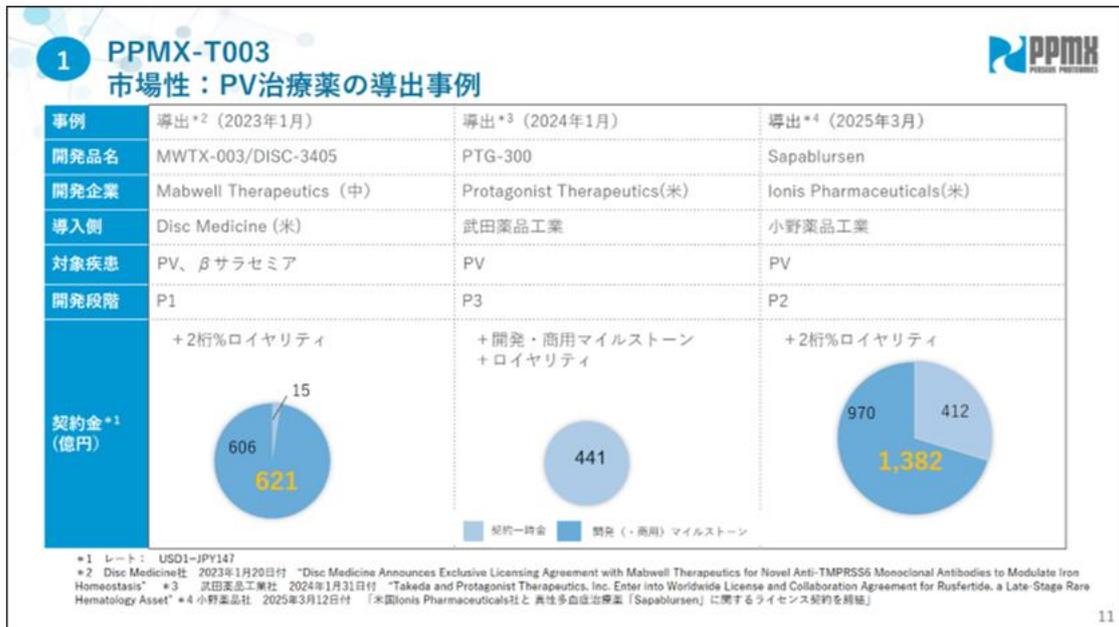
近年、真性多血症治療薬の開発は競合薬が増えてきております。その中におけるPPMX-T003のポジションをまとめたものが、こちらのスライドです。

PV という病気は赤血球の数が増える病気で、その結果、血液粘性が上がり、血栓を起こすことによって脳梗塞や心筋梗塞などを引き起こします。従って、治療のポイントは赤血球を減らすことです。赤血球数を減らす方法は、その原料となる体内の鉄を減らすこと、または造血幹細胞を抑制して赤血球の生産を抑制することになります。

現在中心となっている治療法は、スライド真ん中に書いております瀉血です。瀉血というのは、献血と非常に似たようなもので、血液を抜くことによって体内の鉄量を減らすという効果があります。

これだけで赤血球数を減らせればよいのですが、制御しきれない場合は、スライド左図に示したDNA合成阻害薬、あるいはインターフェロン等の薬剤によって造血幹細胞の働きを抑制することにより赤血球数を減らします。

一方、当社の PPMX-T003 は、青枠で示したよう赤血球生産能力のみを抑制するということで、鉄欠乏症にならず赤血球以外の血球を減らすこともないというコンセプトで、副作用の少ない QOLの改善が期待される新しい治療を目指し開発を進めております。



このスライドは、真性多血症領域で、ベンチャー企業各社が創薬した薬を大手製薬会社が導入しているという姿を現しております。

三つの薬剤を紹介してございますが、いずれもヘプシジンに関する作用機序の薬です。

このように近年、真性多血症領域における新薬開発競争が非常に激しくなっておりますが、一方で見方を変えますと、製薬企業等から非常に注目されている疾患領域であるとも言えます。

2 PPMX-T003
対象疾患：アグレッシブNK細胞白血病（ANKL）

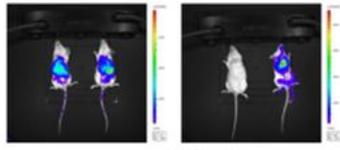
PPMX

超希少疾患ANKLとは

- 平均生存期間 = 58日（約2か月）
- 超希少疾患 2020年 国内発症13例
- AYA世代（15～39歳）、40代に多い
- 有効な治療薬が存在しない

PPMX-T003の効果を実験で確認

治療前 → T003投与後



AMEDの創薬事業に採択
助成金 計2.75億円
(3年間：FY2023/3～FY2025/3)

医師主導治験
開始

12

PPMX-T003 のアグレッシブ NK 細胞白血病の開発状況です。

ANKL という疾患は、生存期間中央値が発病後約 2 ヶ月という非常に悪性度の高い病気です。また患者数の少ない超希少疾患で、2020 年の国内発症例数は 13 例と報告されています。さらに AYA 世代と言われる 15 歳から 39 歳、あるいは 40 歳代の比較的若い世代での発症が多く、現在有効な治療薬がない病気です。

この病気の基礎的な研究に取り組んでいた、現在大阪大学の幸谷先生が、PPMX-T003 を疾患モデルマウスに投与したところ、ANKL がん細胞が消失したという結果を報告されました。スライド左下の写真をご覧ください。ANKL がん細胞を移植したマウスに対して、PPMX-T003 を投与したマウスと投与していないマウスの推移です。写真の青い部分ががん細胞です。T003 投与後といるところを見ていただきますと、投与したマウスだけ、がん細胞が消えていることがわかります。

この基礎研究の結果を受けて、AMED の創薬支援推進事業に応募したところ、採択され 3 年間で 2.75 億円の助成金を受け、これをもとに医師主導治験を始めたという経緯でございます。



この試験は、対象となる患者さんが非常に少ないということで被験者のリクルートに苦労しております。

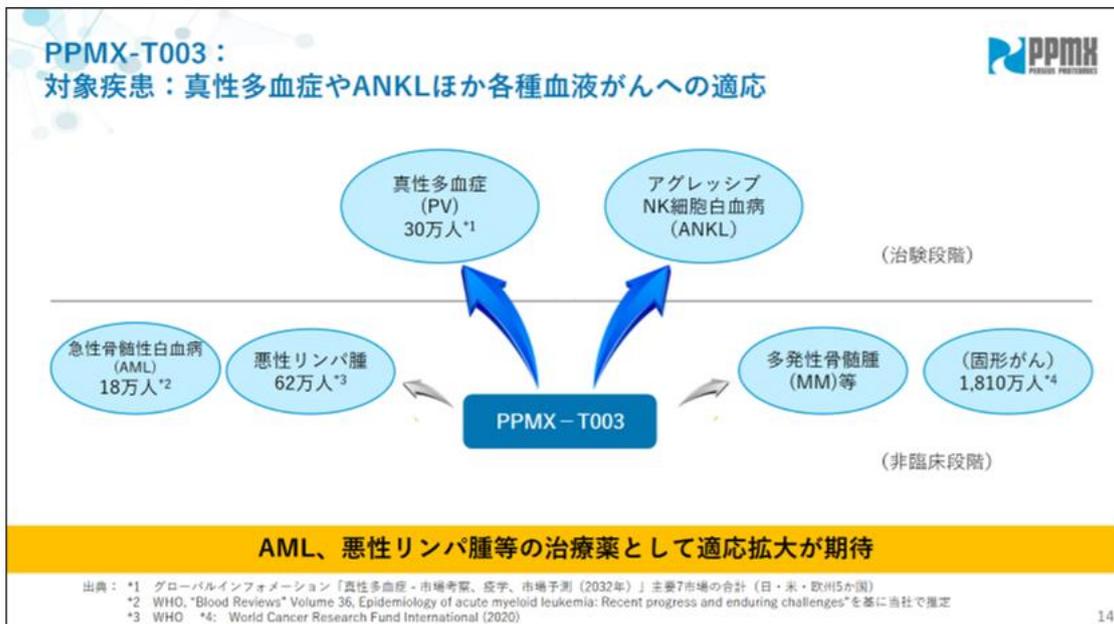
昨年、治験調整医師の判断で、この試験は 2026 年 3 月までの 1 年間延長することに決定しました。

一方、AMED 創薬支援推進事業の支援期間は、2025 年 3 月まででした。

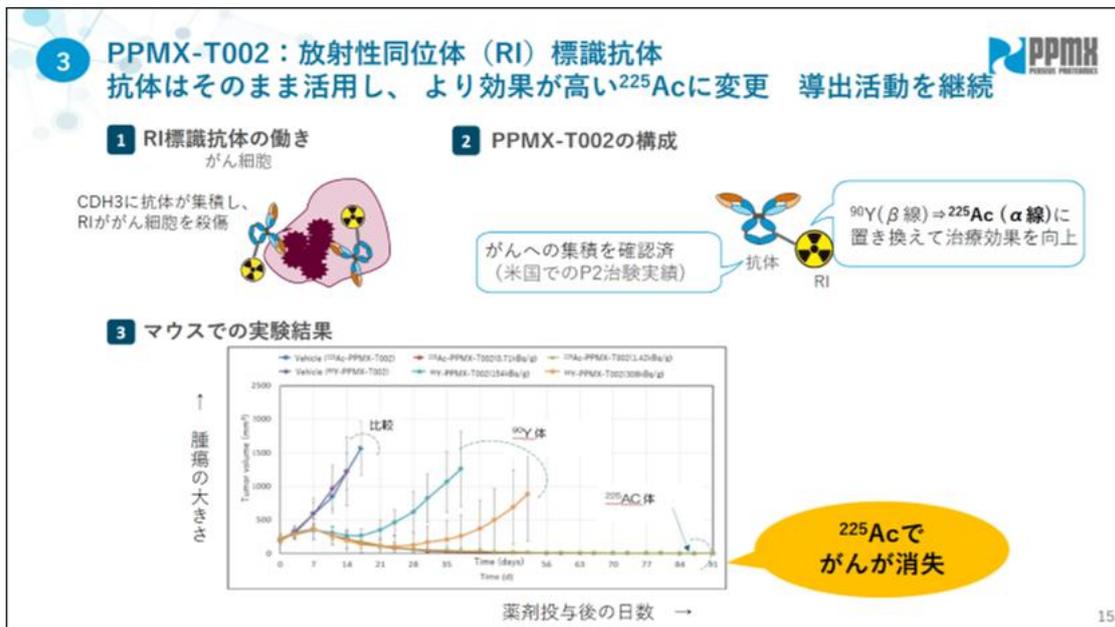
この試験期間の延長を受けて、AMED の同事業にまた応募しましたところ、再びこの事業に採択され 2026 年 3 月には助成金として 1 億円を獲得する運びとなりました。

この事業では、今後 3 年間の支援を受ける予定です。

現在、治験実施施設を 7 ヶ所から 9 ヶ所へ拡大することにより全国を広くカバーし、被験者リクルートを加速させて、この治験を推進しております。



PPMX-T003 は、既に二つの疾患で治験を実施しておりますが、その他にスライドの下半分で示した、急性骨髄性白血病、悪性リンパ腫、それから多発性骨髄腫という三大血液がん、その他に一部の固形がんについても、治療薬としての可能性があるということで現在アカデミアとともに基礎的な研究をしております。



話は変わりまして PPMX-T002 です。こちらは抗体に放射性同位体（RI）を結合させた薬剤です。

抗体が、がん細胞のところ集積し、そこで RI が放射線を出してがん細胞を死滅させるというものです。これまで RI としてベータ線を出す ^{90}Y を用いた薬剤での治験実績はありましたが、現在は、RI をアルファ線を出す、非常に強い薬効のある ^{225}Ac に変更しました。

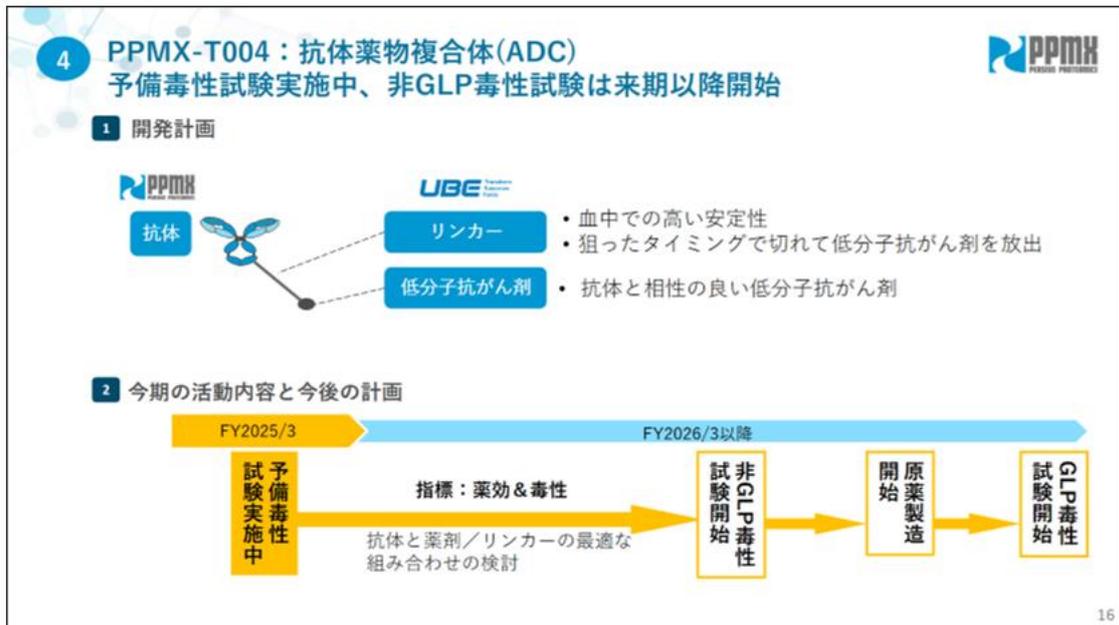
その結果は、学会でも発表しております。

スライド下のグラフをご覧ください。

横軸が PPMX-T002 投与後の日数で縦軸がマウスに移植したがん細胞の大きさです。

比較とある非投与群では、14 日目を超えたところではがん細胞が大きくなっています。一方、真ん中の ^{90}Y 体とあるのが用量の異なる二つの群の推移です。今回の ^{225}Ac 体は一番右側のもので、X 軸に張り付いています。

よく見ますと用量の異なる 2 つの群の線が重なっております。いずれの用量でもがんが完全に消失しております。この薬剤の治療効果は非常に強いということで、これらのデータをもとに、現在、放射性医薬品開発企業への導出活動を行っている状況でございます。



PPMX-T004 は ADC です。ADC はエンハーツの発売以来、非常に注目されているモダリティで、抗体にリンカーで低分子抗がん剤を結合させた薬剤です。

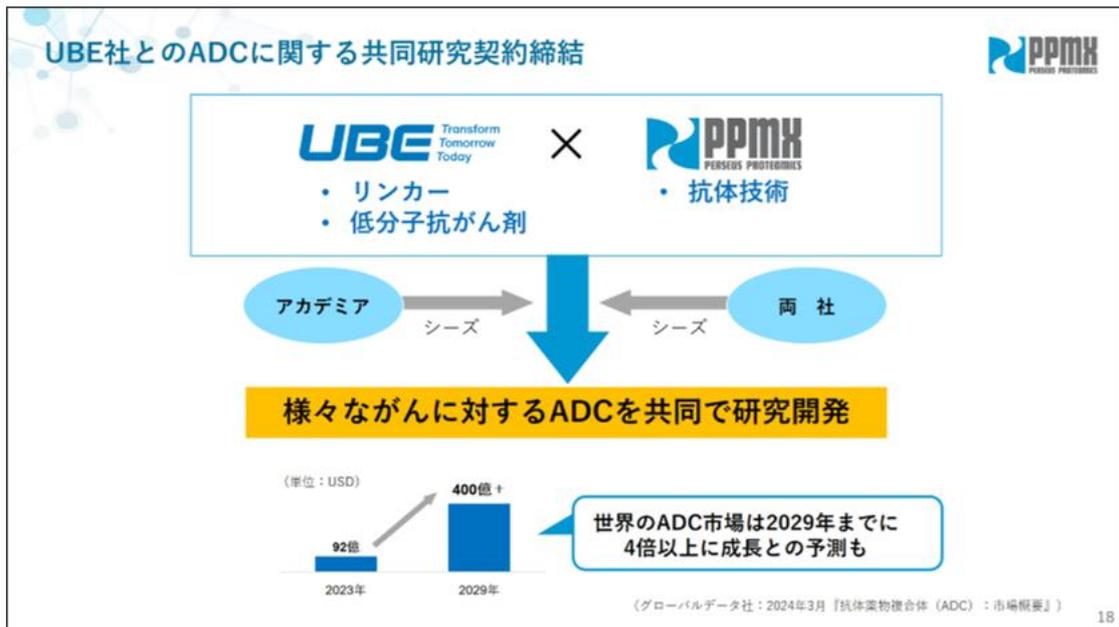
ADC については、UBE 社と一緒に研究をしております。

リンカーと低分子は UBE 社が提供して、我々の抗体と結合することによって、新しい ADC として開発を目指すものです。

PPMX-T004 は、現在、予備毒性試験を実施して非常に強い薬効を確認しました。少し遅れておりますが、今後は毒性との調整に向けて、2026 年 3 月期以降に非 GLP 毒性試験を行います。それに続き、原薬製造を開始し、さらに GLP 毒性試験に進むという計画で進めています。

03 トピックス

続きまして、トピックスについて少しご報告したいと思います。



まず、UBE社と当社との共同研究契約締結の件です。

UBE社は、化学合成で長い歴史と実績のある一流企業であり、ADCに使う新規のリンカーと低分子抗がん剤の研究を行っています。

今回の契約により、UBE社はリンカーおよび低分子抗がん剤を供給し、抗体と結合するところを担当していただきます。当社は抗体を提供する役割です。

この2社がそれぞれで有しているADCの研究テーマをはじめ、アカデミアの先生方が研究されているADC創薬に向けて、両社で力を合わせて様々ながんに対する治療薬の研究開発を推進して行きます。

ご存知のようにADCはエンハーツの発売以来非常に注目を集めており、世界のADC市場は、2029年までには現在の4倍以上の市場に成長するとの予測もあります。

将来に向けて、UBE社と当社は共同でADCに関する課題に取り組んで参ります。

抗体・試薬販売と抗体研究支援事業
 創薬技術を活かした新製品・新サービス導入で収益向上を目指す

抗体・試薬販売 ADC研究用抗体、疾患研究用抗体を発売

 <p>ADC研究用</p> <p>New 抗MMAE抗体 (2024年11月)</p> <p>New 抗Exatecan抗体 (2025年4月)</p>	<p>RIT研究用</p> <p>抗DOTA抗体</p>	<p>疾患研究用</p> <p>New 抗GPCR抗体 (2025年4月)</p> <p>抗mAQP4抗体</p>
---	-------------------------------------	---

抗体研究支援 VHH抗体スクリーニング・作製サービスは2025年5月に提供開始

組換抗体生産	配列解析	組換抗体作製
--------	------	--------

シングルセル・クローニング技術

- シングルセル遺伝子解析
- 希少細胞の回収
- 遺伝子導入後の細胞クローニング

VHH抗体スクリーニング技術

New ● 抗体スクリーニング・作製(2025年5月)

19

当社は、抗体・試薬販売および抗体研究支援事業も創薬に合わせて行っております。
 その新しいサービスとその開始日について、まとめたスライドです。

スライド上が抗体・試薬販売についてです。

ADCでは、payloadと言われる低分子抗がん剤の部分のリセットして評価することが非常に重要になります。

この度、抗MMAE抗体と抗Exatecan抗体をADC研究用抗体として新しく発売しました。
 さらに疾患研究用抗体として、抗GPCR抗体を2025年4月に発売開始しております。

スライド下段は抗体研究支援です。

当社ではVHH抗体スクリーニング・作製サービスを2025年5月より開始しました。

VHH抗体は、分子量の非常に小さな抗体で、近年非常に注目されております。

当社は体内に含まれるVHH抗体の割合が大きいと言われているヒトコブラクダ由来のライブラリを用いたスクリーニングを行っております。

04 2025年3月期決算概況

鈴木：

2025年3月期の決算概況については取締役管理部長の鈴木からご説明させていただきます。

2025年3月期業績

● 損益計算書

(単位：百万円)

	FY2024/3 実績	FY2025/3 実績	
売上高	100	120	抗体研究支援 抗体・試薬販売
売上総利益	87	104	
販売管理費	982	930	PPMX-T003 ANKL治験 PPMX-T003 PV治験
研究開発費	616	594	
その他	366	335	
営業利益	△894	△826	
経常利益	△879	△829	
特別損失	223	72	設備投資の減損損失
法人税等	1	2	
純利益	△1,104	△904	

● 売上高： 前年同期比約20%増（抗体・試薬販売、抗体研究支援ともに増加）

● 研究開発費： PPMX-T003のANKL第I/II相医師主導試験費用、PV患者さん第I相試験費用等
PPMX-T004は抗体と薬物/リンカーの組み合わせの最適化に遅れ

21

2025年3月期の業績です。

損益計算書ですが、左側が2024年3月期、右側が2025年3月期の実績になっております。

2025年3月期の売上高は、1億2,000万円を計上いたしました。

その増加要因は、抗体研究支援が2,430万円で前年同期比17.4%の増、抗体・試薬販売が9,600万円となり、20.5%の増加となりました。

販売管理費は、二つの大きな項目を記載しておりますが、研究開発費は5億9,400万円となりました。

研究開発費で主要なものから説明しますと、PPMX-T003のANKL医師主導試験が8,400万円、PPMX-T003のPV患者さんを対象とした第I相試験が6,300万円でした。その他は、管理費で3億3,500万円となりました。

以上の結果、営業損失は8億2,600万円、経常損失は8億2,900万円、純損失は9億400万円となっております。

2025年3月期 財務状況



● 貸借対照表

(単位：百万円)

資産の部			負債の部		
	2024/3/31	2025/3/31		2024/3/31	2025/3/31
現金及び預金	1,541	1,667	流動負債	128	124
流動資産合計	1,650	1,775	固定負債	166	261
固定資産	42	42	負債合計	295	386
資産合計	1,693	1,818	純資産合計	1,398	1,432
			負債純資産合計	1,693	1,818

- 現預金：資金調達による増加
- 固定負債：PPMX-T003（ANKL治療薬開発）のAMED創薬事業採択による長期預り金
- 自己資本比率：74.3%

22

次に貸借対照表についてご説明します。

まず左側の資産の部の現金および預金ですが、2025年3月31日時点で16億6,700万円となっております。

これは次のスライドでご説明いたします資金調達により現金が増加しておりますが、8億2,600万円の営業損失を計上したことによりまして、1年前と比べまして1億2,600万円の増加となっております。

右側の負債の部の固定負債のところですが、2億6,100万円を計上しております。

これは横川が説明いたしましたPPMX-T003のANKL医師主導治験におきましてAMEDの創薬支援推進事業採択による助成金を長期預り金として計上していることが要因です。

第28回新株予約権による資金調達



第28回新株予約権	
割当日	2024年3月7日
割当先	パークレイズ・バンク
潜在株式数	2,900,000株（2023年12月31日時点の発行済株式総数に対し24.51%）
発行価額	総額1,566,000円（新株予約権1個あたり54円）
調達額（手取）	約9.5億円
行使期間	2024年3月8日～7月1日（完了）
当初行使価額	536円
行使価額の修正	行使請求の効力発生日の直前取引日東証終値の93.5%に相当する金額に修正
下限行使価額	268円（発行決議日直前取引日（2月19日）の東証終値の50%に相当する金額）

23

最後に、昨年実施いたしました資金調達の内容をご説明いたします。

割当日が、2024年3月7日でございます。当初調達額は手取りで15.4億円を目標にしておりましたが、9.5億円の調達にとどまりました。

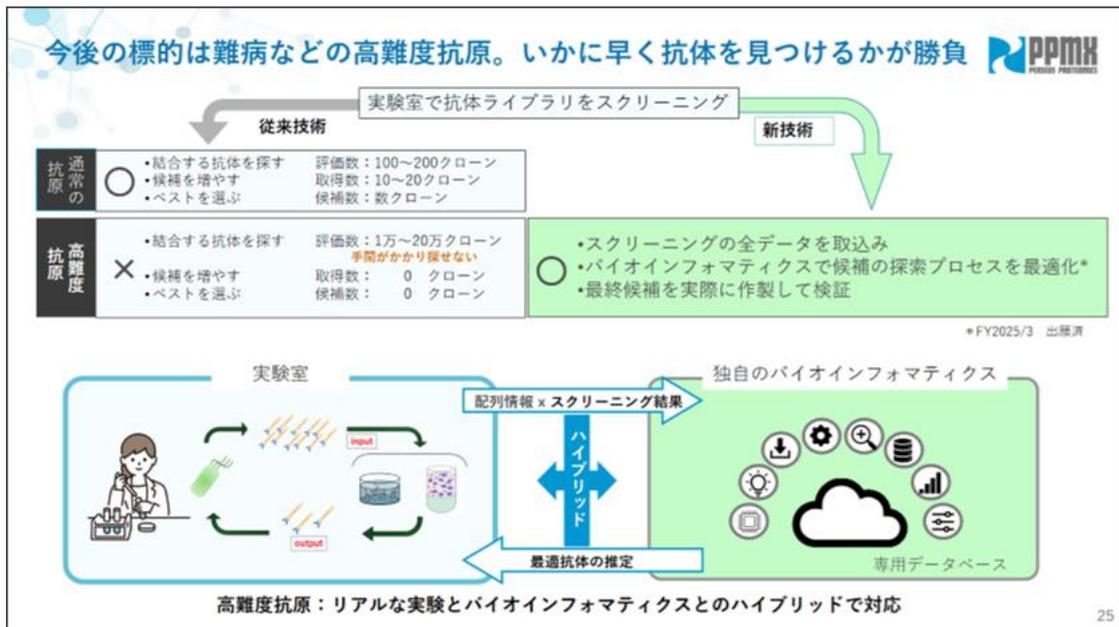
行使期間は、2024年3月8日から7月1日でございます。

以上でございます。

05 当社の目指す姿と取り組み

横川：

最後になりますが、当社の取り組み目指す姿と今後の取り組みについて、数枚のスライドでご説明したいと思います。



今後の抗体創薬における課題は、標的となる難病などの高難度抗原に対する抗体の取得とされています。高難度抗原に対する抗体は、非常に取得が困難なため、どうやって見つけていくか、どうやって取得するかが勝負になると考えております。

スライド左上のグレー矢印は、従来技術を示しています。

普通の抗原であれば、まずライブラリから目的抗原に結合する抗体を探すために 100 から 200 クローンぐらいを評価します。次に、そのクローンの中から良さそうな候補抗体を 20 クローン程度選びます。

そして、それらを更に 10 分の 1 ぐらいに絞り込んだ後、数クローンを選んで候補抗体とします。

しかし、このやり方では高難度抗原に対する抗体をめったに発見できません。高難度抗原に対する抗体の取得では、1 万から 20 万クローンを評価して 1 個あるかないかという世界なのです。

従って、従来技術で高難度抗原を発見することは、現実にはほとんどありません。

そこで当社で取り組んでいるのは、スライド右下に緑色で示したバイオインフォマティクスです。

抗体配列情報とスクリーニング結果の全データをデータベースに取り込み、独自のバイオインフォマティクスで、未知の抗体の探索プロセスを最適化し見出していく方法です。

予想推定抗体を実際に作製し、さらにデータベースを最適化するという、まさにアナログとデジタル、リアルの実験とバイオインフォマティクスによる推定解析のハイブリッドです。

PPMX抗体ライブラリ2

H鎖
L鎖

H鎖 L鎖 DNA配列

L鎖配列に対応したバーコード配列 (ID-Tag) を H鎖とL鎖の間に挿入

PPMX抗体ライブラリ2 (新)

New	他社の100倍の多様性	▶ PPMX抗体ライブラリ1と同じコンセプトで深化
	ライブラリのID化	▶ 簡便に抗体の全配列情報を解析
New	スクリーニング手法のハイブリッド化	▶ スクリーニングの効率化 希少クローンの可視化

抗体ライブラリの進化で活用範囲を拡張 将来的なAI抗体創薬への布石

*特許 ライブラリのID化: FY2024/3出願済, in silico screening: FY2025/3出願済 26

このハイブリッドな創薬活動を推進するキーテクノロジーが、ここに示す PPMX 抗体ライブラリ 2 です。

スライド左上に抗体の模式図を示します。抗体は濃い青色のヘビーチェーン H 鎖と薄い青色のライトチェーン L 鎖から成り、H 鎖、L 鎖の二つの分子が 2 対結合してできている物質です。

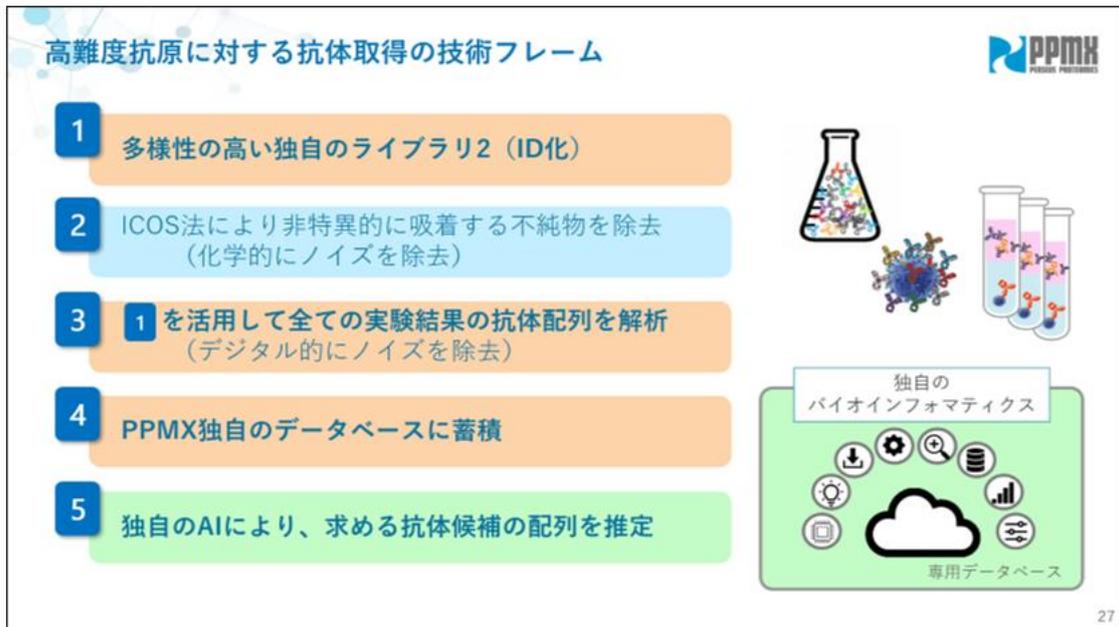
抗体は全ての配列を読むのに非常に手間がかかりますが、PPMX 抗体ライブラリ 2 では、L 鎖配列に対応したバーコード配列を挿入し、ID タグ化して目印を付けています。

つまり、L 鎖配列は読み込む必要がなく、H 鎖配列と ID タグを確認すればよいことになります。

PPMX ライブラリ 2 では、他社の 100 倍の多様性を持つ、これまでの抗体ライブラリのコンセプトはそのままに、それに加えて、ライブラリの ID タグ化は、抗体の全配列情報（可変領域）を簡単に取得することを可能にします。

スクリーニング手法のハイブリッド化は先ほど説明しましたが、スクリーニングの効率化や希少クローンの可視化、つまりデジタルにいろいろな情報を読み込んでバイオインフォマティクスの的に物を取っていきます。

これを将来的な AI 抗体創薬の布石とすべく、非常に力を入れてまいります。



このスライドでは、当社の高難度抗原に対する抗体取得の技術フレームをまとめます。

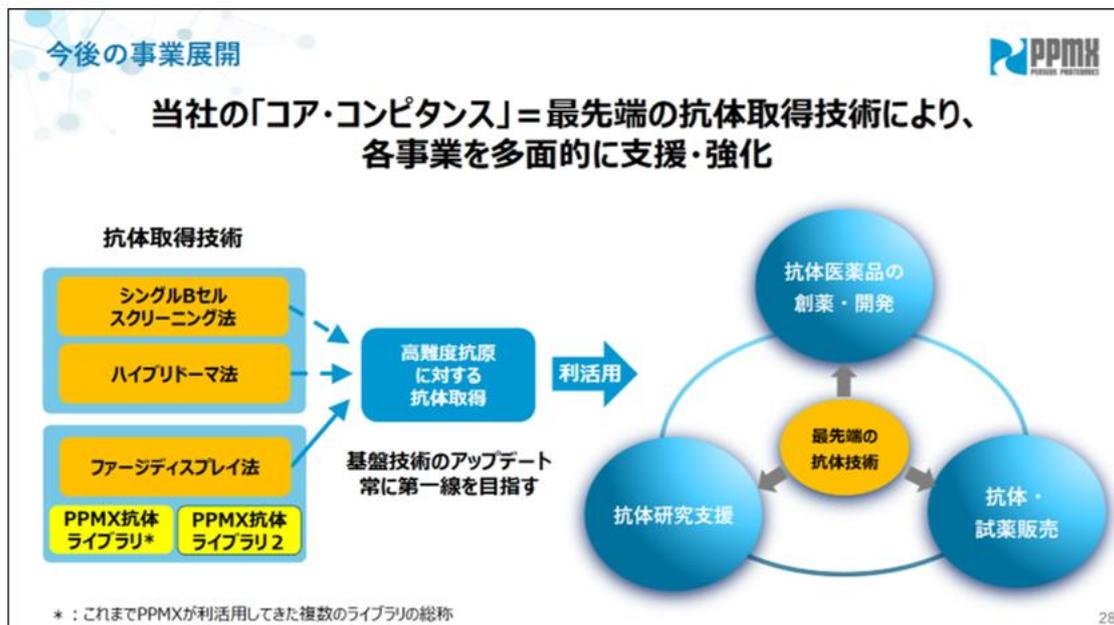
1 番目は、多様性の高い独自のライブラリ 2 を有しており、しかも ID タグ化されていること。

2 番目は、ICOS 法により、非特異的に吸着する不純物の除去。これは、化学的にノイズを除去するということで、非特異的に多数ついた抗体を除くことです。

3 番目は、最初のライブラリ 2 を用いて、全ての実験結果の抗体配列を解析すること。これはデジタル的にノイズを除去していくというプロセスになります。

4 番目は、これらをまとめて PPMX 独自のデータベースに蓄積されていること。

最後 5 番目は、独自の AI によって求める抗体候補の配列を推定していくことです。この部分については、アカデミアの AI 研究グループとも共同でより成功率を上げるための挑戦をしているところです。



こちらが最後のスライドになります。今後の事業展開をまとめております。

当社のコアコンピタンスは、最先端の抗体取得技術をコアに各事業を支援強化するというものです。

抗体取得技術については、スライド左図をご覧ください。

最近非常に注目されているのは、シングル B セルスクリーニング法です。今回詳しくご説明しませんが、弊社もこの技術のキャッチアップに取り組んでいます。それからハイブリドーマ法という伝統的な方法です。当社では 25 年の歴史の中に蓄積された非常に効率的な方法を保有しております。そして、ファージディスプレイ法です。最も特徴ある技術で、従来のライブラリと共に新しいライブラリ 2 を使っています。

当社ではこのような手段で抗原に対する抗体を取得すると共に、常に基盤技術のアップデートをすることにより、第一線を目指しています。

今後はスライド右下の図で描いておりますように、最先端の抗体技術によって抗体医薬品の創薬を推進すると共に、アカデミアや他の製薬企業に対する抗体の研究支援を行い、さらには抗体の試薬販売を強化することで新製品の打ち出しを行います。

抗体研究支援や抗体・試薬販売の売上高は、前期比で 20% 増えている状況です。今後は創薬とともに、最先端の抗体技術を使い抗体研究支援や抗体・試薬販売事業そのものを拡大していきたいと考えています。

最後になりますが、当社は抗体技術の向上をベースに、各事業の発展を目指しております。投資家の皆様には、引き続きご支援をお願いしたいと思います。

< Q&A >

Q1)	年度末に T002003 の導出活動を継続するためのリリースが出されたが、今後の見込みをどのように考えているのか。交渉相手がいて詳細が言えないことは理解しているが、言える範囲で説明して欲しい。
-----	--

- A1) これら 2 剤の導出活動は、まさに経営の最重要課題として現在も取り組んでおります。T002、T003 ともに複数の導出候補先企業さんとの交渉を現在も継続している状況です。一方で繰り返しの回答になって非常に申し訳ないのですが、これ以上の詳細については現在相手があることなのでお答えできないということを、何卒ご理解いただきたいと思います。

Q2)	同一活動を引き続き 2Q を継続することになるとキャッシュフローが心配になるが、資金調達に向けた御社のこれからの考え方について教えてほしい。
-----	--

- A2) 資金調達についてはこれまで通りですね。財務状況を鑑みながら対応するという基本方針で進めてございます。T004 の開発進捗状況、それから T002 および T003 の導出結果を見ながら、今後の資金計画を必要に応じて見直していくことになるというふうに考えています。

Q3)	最近、真性多血症 PV の治療薬として小野薬品の導入契約締結がリリースされました。昨年の武田薬品といい、この基幹領域は新しい開発品目が増えてきていると思いますが、T003 のドイツ活動に与える影響について教えて欲しいです。
-----	---

- A3) ご指摘の通りですね。最近、真性多血症の治療薬は製薬大手が様々なモビリティで導入を進めている状況でございます。我々が 003 を PV のインディケーションでやろうとしたときから比べて、だいぶ状況が変わってきています。これらが T003 の同質の遅延の原因の一つになったことは確かかと思えます。一方で、PV の治験治療薬に対する大手様の関心が非常に高まっているということは事実でございます。当社としては、PV 治療薬に関心を持つ企業はこれまで以上に増えるということを追いかけて見て、ぜひ早期の導出を目指していきたいというふうに考えております。



当社HPにて「ペルセウス通信」を発信しております。
ぜひご覧ください。

- 各IRの補足説明
- 当社に関するトピックス など



<https://www.ppmx.com/newsletter/>